

社会福祉法人さぽうと 21 夏期研修会（農業体験プログラム）

「グリーンツーリズムを通じた多文化共生推進事業」実施報告書

－「平成 28（2016）年度 日本郵便年賀寄附金配分事業」－



社会福祉法人さぼうと21夏期研修会（農業体験プログラム） 実施報告書

－「平成28（2016）年度日本郵便年賀寄附金配分事業」－

今年度は日本郵便年賀寄附金の配分を受け、8月22日から24日にかけて、栃木県大田原市にて夏期研修会（農業体験プログラム）を開催いたしました。約50名が参加し、地域における農業の現状と農家の日常生活を学ぶことができました。以下、実施概要をご報告いたします。ご覧いただけましたら幸いに存じます。

開催の目的と経緯

当会は、母体である「インドシナ難民を助ける会」（現・AAR Japan〔認定NPO法人難民を助ける会〕）の設立（1979年）後、1992年に「社会福祉法人さぼうと21」として同会の国内事業を引き継ぎ、日本に定住するインドシナ難民・条約難民の家族や、日系定住者・中国帰国者の二世・三世などを対象として、教育にかかわる支援を中心に活動を続けております。

これまで毎年、日本各地（主に関東地方）に住む支援対象の学生が集まる機会として、「夏期研修会」を開催してまいりました。近年は「進路選択」を開催テーマにすることが多く、例えば昨年度（2015年）に実施した「外国にルーツをもつ学生の『働き方』発見セミナー」のように、日本の教育制度や就職事情に関する情報不足や言葉の壁などに悩む学生たちが、将来に対する視野（選択肢の幅）を広げる機会を作ることを目指しております。

上記の夏期研修会は、交通の利便性から東京都内での開催が続いておりました。しかし、「自分は居住地域のことしか知らないので、他の地域に住む外国出身者の状況を知りたい」「農業や林業など、日本の地域社会の産業に関心がある」等の声を受け、東京近郊の地方都市での開催を検討しました。その結果、稲作をはじめとする農業が歴史的に盛んであり、行政と民間が連携して農業体験の受け入れを行っている栃木県大田原市での「農業体験プログラム」という形で、研修会を実施することにいたしました。大田原市には食品メーカーも多く、農産物の生産と加工を一貫して行っている地域といえます。

この農業体験プログラム（夏期研修会）では、日本に住む若い外国出身者の成長と社会参加を支える活動の一環として、次のような目的を定めました。

- ・日本各地に住む外国出身の学生たちが交流する機会をつくる
- ・参加者が地元住民の方々と知り合い、外国人住民が多い地域の現状を学ぶ
- ・熱心に勉強に励み、日本社会の一員として暮らしている外国出身者の状況を地元住民の方々に理解してもらう

今年4月以降、日本各地の外国出身の学生向けに参加者を募ったところ54名の応募があり、最終的には11ヵ国出身の51名（高校生～大学院生まで）が参加しました。

参加者（定員 約50名）

参加者 : 51名

国籍（出身国）：ベトナム、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、タイ、中国、韓国、ペルー、ブラジル、ナイジェリア、コンゴの11ヵ国（順不同）

居住地域 : 関東・東海・関西地方

学校別内訳 : 高校生20名、専門学校生4名、短大生2名、大学生16名、大学院生9名

受け入れ農家（14軒）

栃木県大田原市・那珂川町で農業を営む14軒の方々（日本人家庭）

開催日程・場所

日程 : 8月22日（月）～8月24日（水） 2泊3日

場所 : 栃木県大田原市・那珂川町

《研修会場》大田原市湯津上地区公民館（大田原市湯津上5-776）

《農業体験》各農家に民泊して実施 / 株式会社大田原ツーリズム 手配

2泊3日のスケジュール

2016年8月22日（月）

集合・移動

①大型バス：目黒駅集合 ②新幹線：東京駅集合 ③中型バス：宇都宮駅集合

開会（15:00）

14:30頃の開会を予定していたが、関東を直撃した台風9号の上陸に伴う暴風雨により新幹線利用者と宇都宮駅集合者が乗った中型バス及び、役員（自家用車）の到着が遅れ、

15:00過ぎの開会となった。

早く到着した大型バスグループにはアイスブレイキングの時間を設け、体を動かすアクティビティのおかげで、参加者同士が打ち解けるきっかけになった。

オリエンテーション（15：30～）

①大田原市と近隣地域の概要や農業事情の紹介、「グリーンツーリズム・農業体験」についての説明

②栃木県内の外国人住民の状況について【中止】

台風により、講師の宇都宮大学 田巻 松雄 先生と国際医療福祉大学 神山 英子 先生（宇都宮市在住・各自の自家用車で移動予定）が出発できなくなり、残念ながら講義は中止となった。

③外国出身者の進路選択について

インド、中国、ミャンマーなど、アジアを中心に海外で働いた経験が豊富な引率協力者 小松 博史 氏に、外国にルーツをもつことを生かした就職について語っていただいた。

④栃木県を知るクイズ

農家での滞在前に、栃木県と大田原市に関する基礎知識を共有するため、当会が作成したクイズ形式のスライドを上映。宿泊チームごとに話し合い、答えを考えた。

その結果、参加者の間に活発なコミュニケーションが生まれ、短時間で親しくなることができた。

入村式（17：00～）

受け入れ農家の自己紹介、参加学生を代表して大学院生（ベトナム出身）があいさつその後、3～4名のグループに分かれて、各農家に宿泊（2泊）

8月23日(火)

農家での農業体験（終日）

台風の影響が心配されたが、この日の天候は早朝から曇りとなった。夕方以降は局地的に雷雨となったが、無事に農作業を体験し、資料館などを見学して地域の成り立ちを学ぶこともできた。

自分たちで収穫した夏野菜は、農家の方に教わりながら調理した。多くの学生が日本の伝統的な調理方法や味付けに関心をもち、熱心にメモをしている学生もいた。

参加者には卒業後就農を目指している若者や、栄養士になるため就職活動中の学生もおり、卒業後の進路に生かせる体験ができた。

農業体験中、当会の相談員とスタッフ及び引率協力者が各農家を訪問した。その際、全員との個別面談はできなかったが、一人ひとりに声をかけて体調や参加状況を確認し、相談したいことがある学生には時間を取って対応した。

8月24日(水)

集合・退村式 (9:00)

2日間滞在した農家の方々とのあいさつ

参加学生を代表して、大学生(ナイジェリア出身)が謝辞を述べた。

グループディスカッション/感想などのまとめ/個別面談 (10:00~)

①グループディスカッション

大学院生を中心とした9名の学生が、日本の農業事情や、各自の研究分野、進路選択上の悩みなどを話し合った。

食品メーカーの研究職に内定した学生もいる一方で、文系の専攻分野の学生もおり、TPP加盟の影響、農産物の安全性、食糧自給率を上昇させる方策、地産地消のしくみ、後継者問題など、農業分野の専門的な知識の有無にかかわらず、それぞれが関心をもっている事柄について活発な意見交換が行われた。

また、大学院進学を志望している学生にとっては、修士/博士課程に進んだ院生に、大学院での研究レベルや研究生活について相談する機会にもなった。

②感想などのまとめと発表

上記①のディスカッション参加者以外の学生は、宿泊チームごとに分かれて農業体験のまとめと口頭発表を行った。年上の大学生だけでなく、高校生が発表したチームもあった。また、農家の方々への感謝のカード作りを行い、皆、熱心にメッセージを書き込んでいた。一人ひとりが農業体験に積極的に取り組んだ様子が伝わってきた。

③個別面談

進路選択を控えた学生や、生活面で困難を抱えている学生などを中心に、当会相談員との個別相談を行った(面談内容は、後日スタッフ間で共有)。

昼食・交流タイム (12:00~)

台風による水位上昇で、那珂川で伝統的な鮎釣りの「やな」見学はできなかったが、昼食を取りながら、参加者同士、最後の交流タイムを楽しんだ。

就農を目指している学生が、自分の畑に来てほしいと言って他の参加者とアドレスを交換したり、発熱でほとんど農作業に加われなかった学生が、他の学生に体験の様子を聞くなどして、短い期間だったにもかかわらず、同じような背景をもった参加者同士が互いに理解を深めることができた。

移動・解散

①大型バス：目黒駅 ②新幹線：東京駅 ③中型バス：宇都宮駅にて解散

今回の実施に当たり、14軒の農家の方々にご協力いただきました。外国人住民が比較的多い大田原市ですが、日本で育った外国出身の若者と日本人住民が身近に接する機会は少ないと言えます。受け入れ農家の方から、一軒ごとに詳しくご感想を伺うことはできませんでしたが、「非常にしっかりとした良い学生たちだった」、「むしろ日本の生徒より問題意識があり努力していてハッとさせられた」等、日本で育ち、日本で学ぶ中で、さまざまな困難を乗り越えてきた外国出身の参加者たちの様子に、感激されたというお声を多数いただいております。

当会では、農業体験プログラム（夏期研修会）のような企画を今後も継続し、日本に住む若い外国出身者の進学と社会参加を後押ししつつ、外国出身者と地域住民の相互理解をさらに深めるために活動してまいりたいと考えております。



《 3 日 間 の 活 動 ア ル バ ム 》

2016 年 8 月 22 日 研修会場でのオリエンテーション

台風の中、ようやく到着した大田原市湯津上地区公民館にて、アイスブレイキングのゲームを楽しむ高校生から大学院生までの参加者たち。緊張がほぐれて皆、笑顔に。



15 時過ぎ、開会式とオリエンテーション。宿泊チームごとに着席して大田原市や農業体験についてのレクチャーを受けました。稲作が盛んな「大田原」の地名の由来は「大俵」、と聞いて納得。翌日の体験に向けて、真剣に耳を傾けました。最後の栃木県クイズではチームごとに活発に話し合い、会場が沸き返りました。





17時からの入村式では、大田原市と那珂川町の14軒の農家の方々にお集まりいただき、農家代表と学生代表がそれぞれご挨拶。

どのご家族も親しみやすい雰囲気、参加者たちもほっとした様子です。小さいお孫さんの姿も。今夜は早速、自家栽培の野菜などを使って一緒に調理体験をします。



2016年8月23日 農家での農業体験

栃木県北東部に位置する大田原市やその近隣地域は、歴史的に長い間、稲作をはじめとする農業が行われてきました。八溝山系の山並みと清流「那珂川」を有する自然豊かな地域です。(2005年に湯津上村、黒羽町と合併。)米だけでなく、鮎釣りで有名な山間部の黒羽地区ではお茶の栽培、那珂川町と接する南部の湯津上地区では酪農など、地区ごとに特色のある農業が行われています。

今回は、前日の台風の影響が懸念されましたが、雨が止んだおかげで、早朝から収穫作業などに取り組むことができました。各農家では稲作の傍ら、野菜や花卉の栽培も行っています。8月の作業はナス、トマト、キュウリ、梨、スイカなど、夏野菜と果物の収穫が中心でした。

また、地域の成り立ち・歴史や生活文化を知るために、「歴史民俗資料館」や「なす風土記の丘湯津上資料館」などを見学して地元農家の方々から説明を受け、火おこしなども体験しました。



2016年8月24日 退村式と体験のまとめ

朝 9 時に再び、研修会場（大田原市湯津上地区公民館）に集合した参加者と農家の方々。代表者がスピーチを行い、別れを惜しみました。

その後、参加者はグループディスカッションを行う大学院生を中心としたグループ①と、農業体験の内容を発表し合うグループ②に分かれました。

グループ①では、各参加者がそれぞれの専門知識を生かして積極的に話題を提供しました。メディアで取り上げられることの多い農産物の安全性についての問題や、TPP 加盟交渉の行方、地産地消を推進するためのアイデア、最新のバイオテクノロジー技術等々、農と食に関するさまざまな話題が続出しました。

グループ②では、お世話になった農家のご家族への感謝のカード（寄せ書き）を作り、2日間の農業体験を振り返りました。14組の発表（宿泊チームごと）では、高校1年生の参加者が発表を担当したチームもあり、作業の様子や、宿泊先で聞き取った地域の農業の現状に関する話などを詳しく語ってくれました。

皆、終了時間ぎりぎりまで熱心にメッセージを書き込んでおり、短い間だったにもかかわらず、受け入れ農家の方々と心の交流ができたことを実感しました。

また、当会の相談員による個別面談の時間も設け、農作業や民泊についての意見を聞いた他、学校生活や家族の様子、進路に関する相談にも乗りました。

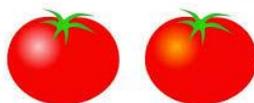
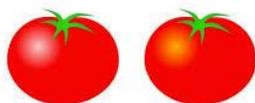




農業体験プログラム 参加者の声（抜粋）



- ◆ 朝7時に起き9時に作業を開始。野菜の収穫と雑草を取りました。これだけでも大変でしたが、もし実際に一から始めるとなると、労力がとても必要なのだと思いました。畑は地域全体にあり、作物の種類が多くスケールの大きさを体感しました。（高校生・ルーツはカンボジア）
- ◆ 初めての体験だったので心配だったけど、農家の方がやさしくて良かったです。すごくいい経験になりました。（高校生・ルーツはペルー）
- ◆ 大きな葉っぱを取るという単純な作業でも、見分けや判断が難しいのと、暑くて大変でした。一年中いろんな野菜を管理していて、農家の大変さを知り、いい経験になりました。（高校生・ルーツはベトナム）
- ◆ 農家さんは高齢化を心配していて、僕たちが手伝うととても喜んでくれた。喜んでくれたことに対して僕たちもうれしくて、このうれしさを多くの人が共有すれば、農業に興味をもつ若者が集まるのではないかと。（大学生・ルーツはペルー）
- ◆ ほおずきを頂いた時、とても甘くて、いつも食べている野菜でもこんなに違うんだなと驚きました。おいしい野菜を知れば、苦手な方も食べられるようになるんじゃないかと思いました。これまでの考えが変わるような経験ができて本当に良かったです。（高校生・ルーツはベトナム）
- ◆ 農家の暮らしは大変そうというイメージが強かったけど、今回の体験で農家暮らしも楽しいなと思った。挑戦してみよう、自分から慣れてみようと思える自分がいてびっくりした。「あきらめないことが大切」だと感じた。（短大生・ルーツはベトナム）
- ◆ 収穫できるものだけを選んで収穫するという事は、思っていた以上に集中力が必要です。農家の方々は私たちの何倍もの速さで次々と収穫を行っており、努力と経験の差を痛感しました。（大学生・ルーツは韓国）



さまざまなお人々と知り合い、多くの学びを得る機会をいただきました。
ご協力いただいた皆さま、誠にありがとうございました。



—2016年8月24日 大田原市湯津上地区公民館にて—

社会福祉法人さぽうと21

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズホビル 6F

TEL : 03-5449-1331 FAX : 03-5449-1332

E-mail : info@support21.or.jp